



Title	織田作之助『土曜夫人』論：「読売新聞」を手がかりに
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 156-169
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/70991">https://doi.org/10.18910/70991</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 織田作之助『土曜夫人』論

——「読売新聞」を手がかりに——

斎 藤 理 生

本論では、織田作之助の絶筆『土曜夫人』(『読売新聞』一九四六年八月三〇日一二・六)を、新聞小説として読み直す。

手続きとして、まず織田と新聞小説との関わりを確認する。次に、短い時間の中に多種多様な人物が交錯する小説の構造を分析する。その上で、小説と初出紙面の呼応とそれを検証する。

このような分析は、織田の他の新聞小説はもちろん、『夫婦善哉』(『海風』一九四〇・四)や『世相』(『人間』一九四六・四)など、『世相』を色濃く反映した代表作について考える上でも重要である。また、敗戦直後における他の作家の新聞小説や、地方紙と中央紙との差異を考える手がかりも得られるにちがいない。

## 一 新興地方紙から大新聞へ

一九四〇年、織田作之助は『夫婦善哉』で「文藝」賞を得、小説家として本格的な活動を始める。織田は当時、作家と新聞記者と、二足のわらじを履いていた。夕刊大阪新聞社で社会部の記者

として勤める傍ら、野田丈六という筆名で『合駒富士』という小説を同紙に連載したこともある。

しかし一九四一年五月一日、新聞統合によって「夕刊大阪」が「大阪時事新報」と合併して「大阪新聞」になつた際に、織田は退社を余儀なくされた。それからは筆一本の生活をした。とはいえ「大阪新聞」との縁は続いていたようである。小説の連載を予定していた作家が急に書けなくなつたときに、一ヶ月間だけ代わりに書いたことがある(『清楚』一九四三・五・一~二九)。また、敗戦直後で新聞社として先が見えず、紙面をどう作つてよいのかわからない混乱期に、半月だけの連載を頼まれ、応えている(『十五夜物語』一九四五・九・五一九)。

ただ、一九四五年ごろになると、織田の作家としての評価も上がってきていた。新聞社にとって使い勝手の良い駒のよくな存在ではなくなつてくる。四五年七月からは、「香川日日新聞」に『光の都』という小説が連載予定で、六月一七日には予告が出て

いた。七月四日の高松市への大規模空襲で新聞社が被災したために連載されなかつた、幻の作品である。予告は、当時すでに表と裏の二面しかなかつた窮屈な紙面の中央に、三段抜きで掲載された。織田の顔写真と「作者の言葉」が載つており、「流麗秀美しかも簡潔にして含みのある作風をもつて、不振の創作界に縦横の活躍を続けつゝある」作家として紹介されている。織田が一人の作家として期待され始めていたことがわかる。

そして一九四六年になると、織田の創作活動は華やかになる。三月には「改造」に『競馬』を、「新生」に『六白金星』を、四月には「人間」に『世相』を発表し、いずれも話題を呼ぶ。その時期に、地方の新興紙からも次々と連載小説の依頼がくる。

背景にはGHQの方針があつた。GHQは民主化のため、大新聞の発行部数を抑制し、地方で新たに作られる新聞に紙を優先的に提供した。『言論の自由』がもたらされた勢いもあり、多くの地方紙が作られ、すぐに競争が激化した。各社は目玉となるコンテンツを求め、新聞小説にも強い関心が寄せられた。地方紙としては、読者がその地に縁の深い人々に限られるので、地元の小説が書ける作家が欲しい。地元出身者ならなお良い。

そこで京都と大阪で、織田作之助が起用された。織田も期待に応え、「それでも私は行く」(『京都日日新聞』一九四六・四・二六～七・二五)と『夜光虫』(『大阪日日新聞』一九四六・五・二四～八・九)という、共にその土地では人気の出た作品を書くことに成功した。

このように実績を積んだことが、「読売新聞」での連載につながつたことは間違いかろう。吉行淳之介は「当時の大新聞の新聞欄は、今では考えられないくらい、小説家にとつての檜舞台であつた」と述べている<sup>②</sup>。では「読売」は、織田がそれまでに連載した地方新聞と何がちがつたのだろうか。

まず発行部数である。やや時代は下るが、一九四八年五月時点の国内新聞発行部数は、GHQ/SACP資料「新聞に関する世論調査」によれば「朝日新聞」三五三万三三二五九部、「毎日新聞」三四三万七三三六部、「読売新聞」一七四万二四九二部、「東京新聞」五三万八〇五〇部、「産業経済新聞」一三万二五八一部、「大阪新聞」三一萬一〇五九部、「京都日日新聞」七万五〇〇〇部、「大阪日日新聞」一一万七一〇〇部があつたという。

「読売新聞」の本格的な全国(大阪)進出は一九五二年であり、当時は「朝日」「毎日」との差は大きかつた。ただ「読売」には尾崎紅葉以来の新聞小説の伝統があり、二大紙に負けない知名度を誇っていた。GHQの指導で、まだ一社による朝刊と夕刊の同時発行が許されていなかつた時代に、中央の朝刊紙として大きなシェアを持つていた新聞から依頼が来た。京阪の／新興／夕刊紙から、東京の／伝統ある／朝刊紙へ。織田にとつてさらに名を挙げる絶好の機会が訪れていたのである。

実は、織田はこの前にも、複数の東京の新聞社から連載小説の依頼を受けていた。しかしいずれも頓挫していた。「それでも私は行く」には、東京の新興紙「みやこ新聞」に並載する話があつ

た。同時期に連載していた『夜光虫』は、「大阪日日新聞」だけではなく「九州タイムズ」と「四国新聞」にも連載していたため、こうした形式は不自然ではない。ところが「みやこ新聞」への連載の話は、先方の都合でなくなつた。夕刊みやこ新聞社の斎藤英一郎から織田への一九四六年四月一四日付書簡（大阪府立中之島図書館織田文庫所蔵）によれば、「いやしくも東京を地盤とする一応の中央紙が京都日々の焼なほし小説を載せるなんて云はれるのが同業界における肩身の狭い」という意見が社内に強かつたためだという。新聞業界の都合を優先させたことで、並載決定にいたらなかつたというのである。

また、別の書簡では「東京新聞」で連載の候補に挙がつたものの、話が急に立ち消えになつたことがわかる。増田周子編「織田作之助と大阪」には、織田が「連載の件、その後構想をねつてゐますから、そのうち筋書き送ります」と書いている。『東京新聞文化部長 宮川宛書簡』が掲載されている。手紙に日付はないようだが、文中に「里見さんのあとでしたら、いつ頃からですか」という言葉があり、里見亨『十年』が「東京新聞」に連載されたのは一九四六年一月二七日から七月一〇日だから、同年の春ごろに書かれた手紙だと推測される。注目されるのは、その「構想」が「構成は、ジイドの『賛金づくり』の調子で、作者と登場人物とを交錯させながら、女の都としての京都と大阪（もちろん現下の世相）のいろんな階級の女性を書きたいと思つてゐます」と明かれていることだ。この内容は『土曜夫人』を想わせる。

ところが「昭和二十一年九月二十二日 青山光二宛書簡<sup>(5)</sup>」では、「東京新聞は文化部でぼくと石川淳の二人に決定してたのんで置きながら、社長が邦枝完二を主張したらしい。これもおかしい。土曜夫人を書いたのは、東京新聞の社長に邦枝完二とどつちがもしろいか、よませたい気持もあつたのだ」と述べている。「読売新聞」で、以前「東京新聞」のために考へていた企画に似た小説を書いたのは、他に良い案がなかつたゆえかもしれないが、目に物を見せたいという気持ちもあつたと推測される。

織田にとつて、東京の新聞への進出は三度目の正直であつた。織田は「土曜夫人」の執筆経緯をしばしば青山宛の手紙で語つてゐる。「昭和二十一年九月十日」付の書簡には、「土曜夫人、改造の編輯長が来ての話では、受けているらしい。（中略）受ける自信は、京日と大阪日日でついている」とある。これまでに新聞小説を書いた経験を活かす心づもりがうかがえる。また「昭和二十一年九月二十二日」付の書簡には、「土曜夫人で今までのぼくの作風の総決算をしよう」という意志も述べられている。

そのためか、「土曜夫人」には過去の作品で使われた話が再利用されている部分が少なくない。たとえば「貴族（五）」には「銀造は既に破産してゐた。沈没船引き揚げ事業につき込んで、失敗した」とあるが、沈没船引き揚げ事業の話は「俗臭」「海風」一九三九・九、「勸善懲惡」（『大阪文学』一九四二・八・九）、『わが町』（『文藝』一九四二・一）など多くの作品に出てくる。また、「鳩（五）」には「初夜の蚊帳を、木崎は八重子と二人で吊つ

た。暗くして、螢を蚊帳の中に飛ばした」とあるが、これは『蚊帳』（大阪新聞）一九四六・三・一に酷似した場面がある。

こうして書かれた『土曜夫人』は、少なくともある時期までは、

織田と戦後文学の代表作と見なされていた。それは初版本（鎌倉文庫、一九四七・四）以降、『現代日本小説大系別冊1』（河出書房、一九五〇・五）や『現代長編小説全集』（春陽堂、一九五〇・六）だけでなく、新潮文庫（一九四九・三）や角川文庫（一九五六・四）に収録され、版を重ねて事実から明らかである。また、吉行は「解説」で「オダサクと『土曜夫人』は切り離し難」と述べ、富士正晴は「織田作之助は偶然と嘘をつく才能とで、彼のいう人間の可能性を追及しようとしていた。それが一番華やかに、一番完璧性をもつて結晶し、流露したのがこの『土曜夫人』であった」（『解説』角川文庫）と高く評価した。

しかし、そのように重要性が指摘される作品でありながら、『土曜夫人』にはまとまった論文の形での先行研究がない。その理由は、伴悦「『世相』・『土曜夫人』論」に「まさに『可能性の文学』の実践化にふさわしい長大なロマンの片鱗をおもわせる下絵ではあった。もちろん中絶の下絵であつたにしても」とあるように、同時期に話題となつた「可能性の文学」（改造）一九四六・一二）と関連する広がりを持ちながらも、未完に終わつたため、論じにくいということだろう。

しかし未完の作品でも、残されている本文の中で、何がなされているのかを論じることは可能である。本論では、『土曜夫人』

でなされた試みを、「読売新聞」を手がかりに考えたい。

## 二 『土曜夫人』の構造

小説の内容を確認する。『土曜夫人』は、土曜日から日曜日にかけての一昼夜を、陽子・茉莉・木崎・京吉・チマ子・坂野・春隆・貴子・章三・露子・カラ子・夏子・銀ちゃん・芳子・北山・銀造ら二〇人近い人物が入り乱れる、全二二章の群像劇である。

作中の時間は、敗戦後、土曜の夜から日曜の夜までの一昼夜である。後述する大阪刑務所脱走事件を指標とすれば、一九四六年八月一日から一二日にかけてということになる。

舞台は主に京都である。ただし大阪駅や中之島公園周辺など、わずかながら大阪も出てくる。また終盤、複数の主要人物が汽車で東京へ移動している。二つの都を軸に、物語はより複雑化する可能性があつたと言えよう。

作品の梗概は次のように整理される。

土曜日の夜、木屋町のキヤバレ工で、ダンサーの茉莉が京吉とのダンス中に青酸カリで自殺する。その姿を木崎がカメラに收める。茉莉の友人の陽子は京吉に話を聞く。陽子もダンサーだが、乗竹伯爵の息子春隆に政治家の娘という素性を見破られ、料亭に誘われる。その前に陽子は木崎を追う（『女の構図』一・一二）。帰宅する木崎がチマ子と出会い、家を入れる。しかし木崎が隣室の坂野と話しひロボンを打つている内に、チマ子はライカと共に消える（『夜光時計』一・一六）。

料亭の主の貴子は愛人の春隆の、次いでパトロンの木文字章三の相手をする。そこに陽子が春隆を訪ねてくる。春隆の思惑を知つた陽子は部屋を飛び出すが、そこで章三と出くわし、素足のまま逃げる（「貴族」一〇七）。

素足の陽子は巡査に「ブラックガール」に間違われて留置場に入れられる。そこで貴子の娘のチマ子と知り合い、木崎への伝言を頼まる（「夜の花」一〇八）。

京吉は靴磨きの少女カラ子に再会する。カラ子は京吉を慕つてついて歩く。京吉は喫茶店でマダムの夏子に陽子からの電話を知らされるが、カラ子と東京に行くと決める（「兄ちゃん」一〇七）。貴子は露子の銀座で店を開く話に乗せられ、春隆を連れて東京に行こうとする。章三は新聞の広告で乘竹侯爵邸の売却を知り、貴子には告げずに自分も上京を決意する（「東京へ」一〇四）。

坂野は新聞で身上相談を読む。その部屋に木崎、次いで京吉が来てヒロポンを打つてもらう。警察から木崎に電話があるが、京吉が代わりに出る。外に出た京吉は陽子を見かけるが、巡査に職務質問されている内に逃がす（「身上相談」一〇八）。

陽子は木崎のアパートに行つて自分を写したフィルムをもらおうとする。木崎は断るが、やはりダンサーだった亡妻の八重子を思い出して陽子に惹かれる（「鳩」一〇七）。

京吉は東京行きの資金を稼ぐために祇園荘で銀ちゃんたちと雀雀をする。喫茶店から京吉に電話がある。スリを尾行しているカラ子からだが、店では坂野の細君も銀ちゃんを待つていた。祇園

荘では京吉の代わりに坂野が来る（「キヤツキヤツ団」一〇九）。喫茶店に京吉が来る。芳子は京吉と話して祇園荘に銀ちゃんがいることに気づく。だがそこには坂野も来ているので、京吉は芳子を止める。その間にカラ子とスリを見失う。スリの北山は親しきつた夜の女の行方を捜しているが、カラ子の尾行に気づき、中島公園で問い合わせる。そのとき大阪拘置所から脱走した囚人の波に巻きこまれ、北山は財布を捨てて逃げる。その財布を脱走したチマ子の父の銀造が拾う（「暮色」一〇九）。

大阪駅で銀造は章三を見かけ、貴子を求めて田村へ行く。だが貴子は露子と春隆と東京へ発っていた。その汽車には章三も乗っている。章三は貴子と春隆の睦まじい様子を見て怒り、デッキに出るが、そこで口論になつた男を突き落としてしまう。その現場を目撃した美しい女は、自分に会いたければ銀座のアルセーヌへ来いという（「登場人物」一〇九）。

カラ子は京吉を探すが見つからない。京吉は芳子と連れ立つて陽子の家を訪ねるが、芳子は逃げる。銀ちゃんは坂野と隼に乗つて、芳子を見かける。戻ってきた京吉は陽子に挑むが、陽子が春隆と関係していなかつたと知り、恥じて逃げる。隼に乗つた京吉は銀造を見かける（「走馬燈」一〇一二）。

このような筋書きにおいて、第一に注目されるのは、土曜の夜から日曜の夜という短い時間の間に、多くの登場人物の動向が、同時進行で語られてゆくことである。年齢も社会的階層も異なる男女が遭遇し、すれちがう様子が描かれる。

多様な読者が想定される新聞小説において、さまざまな人物を登場させたり、異なる場で起る事件を同時進行させたりする手法は珍しくない。織田も『それでも私は行く』『夜光虫』といった作品で実践している。しかし登場人物の数が多すぎたり、頻繁に別の場所に移動したりすると、一日ごとに読み進む読者は記憶しておられず、連続した物語として把握しにくくなる。『土曜夫人』の場合は、あえて中心が定まらないほど登場人物を増やし、場面転換を多くすることで、各人の個性よりも、彼らを含んだ世相を浮かび上がらせる効果をねらっているのだと考えられる。

また、人々が次々に遭遇する。それは、後でくわしく見る「偶然といふものの可能性を追究」しようという「作者の試み」がしからしめているのだと言える。ただし偶然の出会いをリアルに描くためには、必然の支えが不可欠だろう。さもなければご都合主義になり、かえって読者の興を削ぐためだ。

そこで効果的に用いられているのが、自尊心と嫉妬というモチーフである。自尊心と嫉妬は、織田の多くの作品に見られる要素でもある。この小説では、特に陽子や章三が、自尊心の強い人物として造型されている。「好悪感情のはつきりしてゐる陽子は、章三のやうな男のタイプには好感が持てなかつた。章三の全身にみなぎつてゐる自尊心が、元来自尊心の強い陽子を反撥したのであらう」（「東京へ（二）」）と語られているとおりである。

その自尊心が刺激されるゆえに、彼らは普段なら取らない行動を取る。陽子は春隆に料亭に誘われ、京吉は止めるが、「行くな

と言はれると、陽子はもう天邪鬼な女だつた。理由はきかず、命令的な京吉の調子だけが、ぐつと自尊心に来て」（「女の構図（十一）」）、夜更けに料亭に行き、章三に再会するはめになる。

また、章三は「自尊心を傷つけられて、我慢するくらゐだつたら、死んだ方がましだ」（「登場人物（七）」）という「信条」を持ち、「野心以上に自尊心の振幅によつて動く」ゆえに、愛人の貴子が春隆と親しげにふるまう様子を汽車の中で目撃し、「傷ついたままズキズキと脛み出してゐる自尊心のはけ口のない體を、持て余したまま、踵をかへすと、三等車との間のドアをあけて、デッキへ出た」ことで、殺人を犯し、乗竹妹に出会いうことにもなる。もちろん自尊心が強いから行動しないこともある。同じ章では、「汽車の中でいきなり貴子を撰らうとしたのだが、しかし、章三の自尊心はそんな向ふ見ずを彼に許して置くほど、けちくさい自尊心ではなかつたから、一二歩行きかけて、急に立ち停つた」とも語られる。しかしそのためには、感情をもてあましてデッキへ出るのであり、物語を動かす突發的な行動が、主要人物の強い自尊心から生まれているのは明白である。

嫉妬も同様である。カメラマンの木崎にとつて当初、陽子は被写体として魅力的ではなかつた。しかし結婚前に男性関係のあつた亡妻の八重子を重ねることで、陽子への見方が変わつてゆく。すなはち「一昨年八重子が死んでしまつても、消えてしまはず」存在した「嫉妬の火」が、「十番館へ来てはじめて陽子を見た途端、再び燃え上つた」ことで、彼女に注目し始めたのである。

また終盤、行き場のない芳子は京吉に連れられて、陽子の家に行く。が、そこで京吉と陽子の親しさを感じると、あてもなく去ってしまう。「いきなり、飛び出したのは自分でも思いがけぬ嫉妬であらうか」（『走馬燈（七）』）。そしてその芳子の様子を浮気相手の銀ちゃんが見かけるという偶然につながつてゆく。

さらに、貴子の元パトロンで脱獄囚の銀造は、当初は娘のチマ子に会いに大阪から京都へ行こうとしていた。だがホームで以前から嫉妬していた現パトロンの章三を見かける。「顔を見れば、さすがに年甲斐もないこの男かと嫉妬が起つた」（『登場人物（二）』）相手である。だから銀造は貴子を求めて京都に行く。が、貴子と章三は東京行きの汽車の中にいる。このように、自尊心や嫉妬心が複数の「偶然」に必然性を与えているのである。では、こうした「偶然」の物語は、何を目的としているのだろうか。語り手は「登場人物（九）」で、次のように述べる。

この物語もはや八十五回に及んだが、しかし、時間的には一昼夜の出来事をしか語つてゐず、げんに新しい事件と新しい登場人物を載せた汽車が東京へ向つて進行してゐる間に、京都でもいかなる事件がいかなる人物によつて進行させられてゐるか、予測の限りではない。

そして、このことは結局、偶然といふものの可能性を追究することによって、世相を及び上らせようといふ作者の試みのしからしめるところであるが、同時にまた、偶然の網にひ

つ掛つたさまざまな人物が、それぞれ世相がうんだ人間の人として、いや日本人の一人として、われわれもまた物語の主人公たり得るのだと要求することが、作者の足をいや応なしに彼等の周囲にひきとどめて、駆足で時間的に飛躍して行かうとする作者をさまたげるのだとも言へよう。

傍線を付した箇所において、「偶然」によつて「世相」を描こうというねらいが明らかにされる。重要なことは、このように「作者」が作中に現れる仕掛けも、世相を浮き彫りにするために用いられているはずだということである。

どういうことか。作中に作家が登場して作品の意図を示すことで、一般的な小説に比べて、虚構と現実との区分が曖昧になる。まして、この小説が発表されているのは、単行本でも雑誌でもなく新聞である。新聞小説の特徴の一つに、小説以外の記事や広告と同一平面上に置かれていることがある。いいかえれば、読者は虚構を、虚構以外のものと同時に視野に入れて読むのだ。

物理的にも、虚構と現実との距離が非常に小さい。そこにメタファイクション構造が取り入れられる。そうすることで、紙面に反映する〈世相〉を小説に組みこみやすくしているのである。このように考えるのは、『土曜夫人』が、新聞の読まれ方に意識的な新聞小説であるからでもある。

新聞は誰でも読む。（中略）しかし、同じ新聞を同じ時に

ひらいても、一番さきに眼にはいるのが、同じ記事だとは限らず、某侯爵邸の売物の広告が何よりも先にぱッと眼にはいるのは、余ほどの偶然であらう。(『東京へ(四)』)

猫も杓子も新聞を読む。同じ記事を読んでゐる。(中略)  
われわれが思つてゐる以上に、ひとびとは一番さきに新聞の同じ欄を見るだらうし、また、われわれが思つてゐる以上に、ひとびとが一番さきに見る欄は、それぞれ違つてゐるのだ。(『身上相談(一)』)

新聞小説で、新聞の読まれ方の多様性が語られる。この新聞小説には、他の記事や広告と同じ平面で読まれることで起こる「偶然」への自覚がある。そして実際に虚実の境界が乗り越えられるときには、メタフィクション構造が重要な役割を果たす。

語りの水準の侵犯が珍しいのではない。それは織田が「東京新聞」宛の手紙で挙げていたジイドの『賛金つくり』だけでなく、日本でも一〇年ほど前に、太宰治、石川淳、高見順らが積極的に試みていた。新聞小説におけるメタフィクションの先例としても、たとえば高見順『東橋新誌』(『東京新聞』一九四三・一〇・三〇)、一九四四・四・六)が挙げられる。しかし織田の新聞小説の場合、紙面と重なる〈世相〉を作中に取りこむことで、創作欄と他の記事との境界を低くするねらいがある。メタフィクションと、紙面の他の欄の利用。織田が新聞小説でくり返した二つの手法は、〈世相〉を描く目的において連繋しているのである。

### 三 『土曜夫人』と新聞

織田は『土曜夫人』において、新聞小説としてさまざまな技法を試みている。たとえば、処女の貞操の危機で引きつけることがある。それは小杉天外『魔風恋風』(『読売新聞』一九〇三・二・二五・九・一六)、菊池寛『真珠夫人』(『東京日日新聞』/大阪毎日新聞)一九二〇・六・九(一二・一二)などが想起されるように、明治大正期以来の新聞小説の常套手段だと言える。織田も『それでも私は行く』で既に同じ技法を使つてゐる。『土曜夫人』でも、「走馬燈(十)」に陽子が京吉に挑まれる場面がある。

もつとも『土曜夫人』の場合、性的な表現として主に注目されたのは、貴子の描写である。春隆や章三にしなだれかかる貴子の「四十女の色気」が具体的に述べられ、さらに「貴族(一)」などの小磯良平の挿絵に半裸の貴子が描かれることで、男を誘惑する貴子の姿は読者に強く印象づけられることになる。

そのために「新聞小説の卑猥化」が問題視されるまでになる。一九四六年一〇月二四日付『日本新聞報』には、「新聞小説の卑猥化 各方面の意見を聴く」という特集が組まれ、「憤慨に絶えぬ」という一高校長の天野貞祐および「読者も有難迷惑」という丹羽文雄の談話が載つた。ただし、併載された「教科書でない」という読売新聞文化部長の原四郎の談話では、「織田作之助の文學がエロ文學であるかどうかといふ点について、私個人としてはニヒリズムの文學であつて舟橋聖一や邦枝完一のエロ文學と混同

したくない」と擁護された。また「営業的には確かに成功であり、販売の方では非常に喜んでゐる」し、「こんな小説は家庭に入れられない」といふ逆説的な抗議もあるが（中略）新聞小説として圧倒的な成功ではないまでも一面には新しい分野を開いてゐると自負する」と述べられている。

とはいへ、性的関心を煽つたことは、作家仲間からも評判が悪かった。それは高見順の一九四六年一月二三日付の日記において「織田君を私は全面的に認めないのでない。しかし『土曜夫人』は、いかん！ 痴態と媚態以外に何もないじゃないか」という言からもうかがえる。

しかし『土曜夫人』は「痴態と媚態」を中心にしているだろうか。前述のような貴子の描写を、語り手は滑稽化している。

しかし、彼女はその服装では、一つだけ失敗してゐた。彼女の服装が時に滑稽に見えるといふことに、気がつかなかつたのだ。これは重大な手落ちだ。すくなくとも、春隆はそんな貴子の恰好を見て、噴き出したくなつてゐた。（貴族（二））

貴子は語り手に迂闊さを指摘され、誘惑相手に影で笑われている。性的な興奮を煽る効果は薄められている。織田にとって「痴態と媚態」は、読者を引きつけるための技巧のひとつに過ぎなかつたのではないか。

むしろ織田が工夫を凝らしたのは、紙面との連動である。もちろん現実の世界を報じる紙面との連動は、多くの新聞小説でなされた。しかしこの小説では、極めて多様な角度から、積極的になされているように思われる。

まず、政治欄との関わりがある。小説には、陽子の父の鉢三が、金融封鎖反対論を説いていることが語られる（「夜の花（三）」）。その一ヶ月ほど前の「読売新聞」では、加藤勘十という社会党議員の反対論が記事になっていた（「金融措置令改正と各党の態度社会党 全面的に反対 加藤勘十氏談」（『読売新聞』一九四六年八・一）したがつて当時の読者は、作中人物の意見と、過去に実際あつた紙面とを重ねることができたはずである。

広告欄との関わりもある。「東京へ（三）」において、章三は新聞を広げて、「堺邸、某侯爵邸、東京近郊……」という廣告に目をとめる。これとよく似た廣告が、実際に「読売新聞」にあつた。九月六日第二面には、「土曜夫人」第八回が掲載されているが、その二段上に、「某侯爵邸分譲」の廣告が載つていてある。【図参照】同じ新聞の同じ面の近くに掲載されているため、「土曜夫人」の読者の大半がこの廣告を見ていたはずである。

連載中の「読売新聞」の廣告欄には、ダンサーの募集やカメラの売却など、他にも作品に登場する事物が載つていた。その点でも新聞読者は作品世界をリアルに受け取りやすかつたと言える。これら廣告欄と創作欄との関わりは、偶然の要素が大きい。作家に制御できることは少ない。しかし、地方紙において廣告欄と

創作欄との相互作用を活用していた織田は、そのような偶然を引き起こす仕掛けを大量に仕込んでいたと考えられる。

また、織田が紙面との対応を直接的に意図した場合もある。それは社会欄との関わりからうかがえる。「兄ちゃん（四）」で、京吉とカラ子は「おれと一緒に歩くと、誘拐されるぞ！」「うん。兄ちゃん誘拐して！」という会話をする。なぜここで「誘拐」が強調されるのだろうか。また、「キヤツキヤツ団（一）」で京吉は、

「おれと一緒に行こう」といふ。この「おれ」とは誰なのか。

現在の読者が予備知識なしに読むと浮かぶこれらの疑問は、連載当時の新聞読者にはわかりきったことであった。一九四六年九月には、世を大いに騒がせた誘拐事件があり、その犯人が「樋口」という名前だったのである。「住友本家の令嬢、学校前から誘拐される」（一九四六・九・一九）、「誘拐魔樋口捕る 岐阜県付

〔図〕「読売新聞」一九四六年九月六日第三面

## 土曜夫人

（小説）

（原作）

（脚本）

（監修）

（脚本）

「敗戦後のフランスの暗さと苦悶は日本のそれと大差はない。しかも日本ではこの暗さと苦悶が文学的に一体何を生んだか、何も生みはしなかつた、たかだか第二封鎖級の老大家の作品がものめづらしげに取り出されたほか、僅かに織田作之助、坂口安吾の作品—これを新円級といつては無礼になる—がなものかをほのかに暗示しつつあるばかりである」と述べた。

これらは先にあげた「卑猥化」への批判に対する、新聞社側の理論武装にも見える。だが人気急上昇中の作家と三高のフランス文学者が共に、織田の名前を出した上で新しい文学を語っており、同じ紙面で『土曜夫人』が連載されていた事実は見過せない。

なるほど安吾と伊吹の専門的な意見を咀嚼できた読者は多くなかつたであろう。しかし彼らの言説によつて、読者は同じ面で小説を連載している作家が「肉体」を描くことに、思想的な意味があることがうかがえるようになる。それは作品の内容だけではなく、方法や構造を楽しむ視座を与えたはずである。

このように『土曜夫人』には、初出紙面で読むことで際立つ面白さがある。が、必ずしも良い話ばかりではない。家庭欄との関わりを見たい。「身上相談（一）」で、坂野は新聞の身上相談欄を読む。そこに復員してきた男性の相談が語られている。男性は出征中に、ある巡査に妻と関係を持たれ、金を使われ、子どもを連れ去られてしまつたという。その記事を読んで坂野は憤慨する。しかし、これは初出で『土曜夫人』を読んだ読者が、違和感を覚えかねない場面であった。先に取りあげた、章三が新聞で広告

を見る場面の面白さは、作中人物が新聞を読む視線と、読者が新聞を見る視線とが重なることについた。「偶然」に人生を賭ける

ところが、坂野が新聞を読む場面は逆である。当時の「読売新聞」に「身上相談欄」は存在しない。今で言う家庭欄的な記事は

皆無ではないし、読者の声を拾う投書欄もないわけではない。しかし身上相談欄はない。したがつて、坂野の読む新聞と、同時代読者の目の前にあつた新聞とは異なる。作中人物と読者との新聞を読む視線のずれが露わになつてしまふのだ。

実は、この「身上相談」は別の新聞の記事を参考して書かれたと考えられる。一九四六年九月二三日付「夕刊新大阪」第二面に掲載された「人生案内 出征中に巡査が妻を 復員恐れて嬰兒と逃去る」である。紙幅の関係上長くは引用できないが、「土曜夫人」で「問——私の出征中、妻は、御主人は前線から帰りませんよといふ一巡査の言葉に偽はられて、不倫の関係に陥り、つひに子供まで出来てしまつたのでした」と始まる相談が、「夕刊新大阪」の「問 私の出征中、妻は「前線から帰られない」といふ巡査の言葉に偽はられて不倫の関係に陥り、遂に子供まで出来てしまつたのでした」という相談を元にしていることは明白であろう。織田は、やはり敗戦後の混乱を象徴する、実際に新聞に載つた手紙を用いることで、作品世界に現実性をもたらそうとしたのである。内容は先に述べた嫉妬のモチーフともつながるし、このあと坂野は妻の芳子を銀ちゃんに寝取っていたことがわかると

いう構成の妙もある。しかし、坂野の読む新聞と、読者の目の前にある新聞との齟齬は決定的である。

織田は地方新聞で、紙面と連動させた小説で成功した。その勢いで「読売新聞」でも紙面と連動する効果を使つた。ところが、織田は小説に地方新聞の記事をも取りこんでいる。その結果すれも生まれているのだ。そして、それはこの部分だけではない。

「暮色（九）」には、チマ子の父で貴子の元旦那である銀造が、大阪の拘置所からの集団脱走の流れに乗る場面がある。これも実際にあつた事件を元にしている。一九四六年八月一三日付の「読売新聞」でも報じられている。

ただ その「百卅名を逮捕 大阪の集団脱走」という記事は非常に小さい。二面の下の方に一段で九行である。翌日以降に続報もない。当時の「読売新聞」はもっぱら関東地方で読まれていたため、ニュースバリューが小さかつたということであろう。

しかし、事件が起つた大阪ではパニックが起つていて。当時の「朝日新聞」の東京版と大阪版を比較すると、東西の差異が鮮明になる。八月一二日付東京版の記事は、第二面中央下段に、二段抜きの大きさである。同日の大阪版の記事は、第二面最上段右端に、三段抜きの大きさである。大阪版では翌日も翌々日も、関連する報道が続く。が、東京版はこの一回で終わりである。

大阪の地方新聞は、もちろん大々的に取りあげていた。たとえば「大阪日日新聞」の一九四六年八月一二日の紙面では、一面の題字の横、最上段右端という最も読者の目に付きやすい位置に記

事が置かれている。そして翌日も翌々日も、脱走者が何人捕まつたのか、責任の所在はどこにあるかといった報道がなされた。

しかし、それらは関東圏の読者には馴染みのない話である。そのため、大阪の脱獄事件が組み入れられても、現実と虚構が入り交じる感覚は生まれない。また、そのような感覚を持てるはずの近畿圏の読者には、新聞が行き渡つていなかつたのである。

もはや織田を取り巻く状況は、地元の新聞で思いつくままにやつていた頃とは変わつていて。京都で『それでも私は行く』を書いていた頃に支持された、土地の名前や店の名前を次々に作中に持ちこむ方法も、広範囲で読まれている新聞では使いにくい。記事と広告と創作が言及し合う、地方夕刊紙時代に見られたダイナミズムは失われているのである。

現実の時間との不一致も見逃せない。脱走事件が起つたのは八月である。誘拐事件が起つたのは九月である。だから銀造が脱走する頃に、京吉が「桶口」を語るのは、辻褄が合わない。織田は現実の事件を取りこむ上で、複数の事件を圧縮することで濃厚な雰囲気を作ろうとしたのである。しかしその方法が生む齟齬は、注意深い読者に抵抗を覚えさせた可能性がある。

このような齟齬は、織田が執筆しながら構想を練つていたために生じたとも考えられる。「文学的饒舌」（『文学雑誌』一九四七・二）には、「題を決めるのに一日、構想を考えるのに一日、たのまれてから書き出すまでに二日しか費さなかつた」とある。準備不充分なまま書き始められたのは『十五夜物語』『それでも

私は行く』などと同じである。しかし「安易な態度ではじめたのだが」途中からは、「決然として、この作品に全精力を打ちこむ覺悟をきめた」とあるように、しだいに意氣込みが変わつてくる。

小説が執筆過程で少なからず変化したことは、青山光二への手紙からもわかる。「昭和二十一年九月 日」付の書簡では、「筋の見通しまだコントンとして全くつかない。春隆の妹が六十回あたりで出て来る予定だが、これが章三と二人である意味の主人公になるだろう」と語られている。ところが、同年「一〇月 日」付の書簡では、「九十回目あたりで侯爵の妹が出て来て、章三と意外な事件を起し、結局これが小説のヤマになるのと、八十回前後で、貴子の前のパトロンが刑務所を脱走する事件が重要」だと語られている。わずか一ヶ月で、乗竹信子の登場場面が三〇回分も遅れた。それだけ構想が変化したのである。

結局、織田は倒れて『土曜夫人』を書き終えられなかつた。ただし「読売」からは年内での打ち切りを通告されていたという。つまり、この後さらに変わらざるを得なかつたはずなのである。この先の展開が予測不可能なわけではない。「鳩(七)」には「葉子は階段を降りて行きながら何かしらもう一度このアパートへやつて来ることがありさうな気持に、ふつとゆすぶられてゐた」とある。おそらく陽子と木崎は再会するのである。また、同級生に設定された陽子と乗竹信子も会うだろ。京吉とカラ子も東京に行こうとしており、カラ子の出身地と信子の勤め先が同じ銀座であるから、彼らにも重要な役割がありそうである。銀座

は章三が向かい、貴子が店を開こうとしている場所でもある。一方で、冒頭で茉莉が死を選んだ理由は謎のまま残つてゐる。

伏線は多く残されている。織田にプロットの腹案もいくらかはあつたはずである。しかし、それも変更が予定されていた。さらなる偶然の「可能性」を期待させたまま残してある小説だと言えよう。ただ新聞小説として決して短くはなく、敗戦直後の「世相」を描く目的はある程度まで達成されているはずである。

あるいは、たとえ完結していても、伏線は回収されなかつたのかもしれない。先に引用した九月某日付青山光二宛書簡では、「最後まで新しい人物がつぎからつぎへ出て来るという型破りの新聞小説になるだろう」とも語つていた。また、荒正人は『土曜夫人』は「徹徹尾偶然で組み立てられた、動きのやたらにおほい小説である。前後の脈絡など覚えてゐなくとも、その場面、場面を愉しんでゐさへすればそれでゐる」<sup>(8)</sup>と述べていた。要するに、一回一回をそのつど楽しめばそれでよい小説かもしれない。次々に別の人間が登場するために、継続的に読んでいる読者と途中参加の読者との差異が生じにくい。『土曜夫人』は、どの回から読んでも楽しみやすいという意味でも「偶然」を許容する小説だったのではないか。なにしろ新聞が物理的に手に入りにくかつた時代である。序盤の布石を記憶し、最初から最後まで統けて読めた読者は多くなく、作家も期待しづらかったであろう。『土曜夫人』が連載されていた時期、新聞社は第一次読売新聞争議の渦中にあつた。この事件が織田の視野に入つてゐたことは、

青山光二宛の手紙から明らかである。

单一ゼネストが東京での大問題であるかも知れないが、しかし、ぼくはいかなる時でも団体とははなれて行動し、考へる男だから、労働者のカッサイをはくしたり、読者カクトクのためや、東宝映画化の効果のためや、他の新聞に飛びつかせるために、ぼくが命をすりへらして書いてゐる仕事を中断させようとは思はない。(中略) ぼくはヨミウリも单一も双方ともに同情するし、双方ともに同情しない。<sup>(9)</sup>

織田が言うように、イデオロギーに縛られない点に彼が描いた

〈世相〉の特色もあるにちがいない。しかし敗戦直後のこの時期、イデオロギー的な対立が社会に強く反映していたことは事実であ

ろう。いわゆる二・一ゼネストは、『土曜夫人』連載終了から二ヶ月も経たぬ内の出来事である。読売争議にもG H Qの意向が絡んでいた。だが織田はそうした世の動きには無関心である。

織田はあくまで形而下の現実を描こうとした。その結果『土曜夫人』には当時の〈世相〉が濃厚に反映されている。それはまた、敗戦直後の記憶が街から消えていった一九七〇年代以降になつて、『土曜夫人』が読まれなくなつた主たる理由でもあるだろう。一方、発表当时において既に懐古の対象となりつつあつた光景を描いた『夫婦善哉』は、今なお読まれ続けているのである。

注

- (1) 詳細は拙稿「織田作之助『それでも私は行く』論——〔京都日々新聞〕を手がかりに」(『国語と国文学』二〇一二・一〇)と「織田作之助『夜光虫』論——〔大阪日日新聞〕を手がかりに」(『国語国文』二〇一五・一二)を参照されたい。

- (2) 「解説「ウマい」ということ」(『定本織田作之助全集第七巻』文泉堂出版、一九九五・三)

- (3) 井川充雄『戦後新興紙とG H Q』世界思想社、二〇〇八・一一、九九一一〇一頁

- (4) 大阪都市遺産研究叢書 別集3 関西大学大阪都市遺産研究センター、二〇一三・三

- (5) 『定本織田作之助全集第八巻』、文泉堂出版、一九九五・三。以下、青山宛の書簡は特に断らない限り同全集に拠る。

- (6) 『大阪文学』一九六九・四

- (7) 『終戦日記』文春文庫、一九九二・一

- (8) 「解説」(『現代日本小説大系別冊1』河出書房、一九五〇・五)

- (9) 「織田作之助からの手紙」(高橋徹編『月の輪書林古書目録十七特集・ぼくの青山光二』月の輪書林、二〇一四・一二)

〔付記〕本論文は、二〇一六年八月五日に大阪大学で開催した研究集会「新聞のなかの文学」における口頭発表、織田作之助『土曜夫人』論——新興地方紙から「読売新聞」へ」を基にしている。また、本文はJSPS科研費JP26770078の助成を受けたものである。

(さいじゅう・まさお 本学准教授)